

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校が建つ旧都南地区南部北上川流域に近い地域は、これまでも集中豪雨による冠水や浸水被害の多い地域である。また、水田が多いため地盤が軟らかく地震発生の際は大きく揺れる。本校では東日本大震災津波より「内陸に住む私たちにも沿岸地域のために何かしたい。微力だが無力ではない」という機運が高まり、毎年沿岸地域へのボランティア活動に取り組み、震災から学ぶ命の大切さを学んできた。このように、本校では浸水被害と地震、さらには地震から発生した火災に備えた取組みに特化して活動してきた。

以上のことから、特に水害と震災について本校活動のスローガンである「つづける・つなげる・つたえる」をさらに深めながら、防災教育を中心にキャリア教育と復興教育を絡めながら地域での災害復興リーダーの育成と地域間での絆を深めることを目標に取り組んでいく。

II 取組の概要

1 防災教育

【ねらい】

有事の際に自分の命を守ることができる（自助）とともに他者と協力して生きていくことができる（共助）の精神を養う。

【取組み】

（1） 防災・避難訓練

全校による防災避難訓練。地震発生からの火災を想定して、はじめは机の下に身を隠し、その後校庭へ避難する訓練。口をハンカチで押さえながら逃げる訓練をした。その後消防署員の協力で消火器による消化訓練を実施した。火災想定が化学室からの出火のため、教員間で薬品の燃焼等が考えられる場合の消火方法について周知徹底をした。

また、盛岡市のシェイクアウトにも参加し、地震を想定した抜き打ちの訓練を行った。教員が不在の場合でも、自らの判断で行動できる習慣づけを行うことが出来た。

（2） 救護訓練

年はAEDを使った心肺蘇生訓練、2学年は三角巾を使った応急救護訓練、3学年は毛布を使った負傷者運搬作業訓練を実施した。生徒は、周りとは協力しながら真剣に集中して取り組んでいた。



避難訓練の様子



救護訓練の様子

（3） アルファ米の試食と炊き出し訓練

アルファ米の試食実習や家庭科の協力で鍋による炊き出し実習を実施した。実際に炊き出し実習をすると、調理過程や時間配分が難しかったが、生徒たちは、実習に積極的に取り組み、有事の際に日頃から訓練をして備えておかなければならないことの大切さを学んだ。



2 復興教育

【ねらい】

東日本大震災津波以後本校での「つづける・つなげる・つたえる」の精神のもと、これまでの経験を今後の危機管理に活かし、命を守る態度を養うとともに、地域に関わり、有事の際の復興防災リーダーの人材を育成する。

【取組み】

(1) 1学年東日本大震災津波被災地見学

この被災地見学はこれまでも行われてきた活動ではあるが、今年度は事前学習として、被災された方を招いて、講演会を行った。当時の写真を見せていただいたり、体験されたこととお話いただいたりし、より真剣に震災による被災について考えることができた。また、見学の前には東日本大震災について調べ、それを踏まえて見学を行うことができた。

初めて実際に沿岸を訪れる生徒も多く、今後の防災復興について意識を高めていた。レポートについては文化祭にて展示による発表を実施した。



沿岸被災地で説明に聞き入る1年生

(2) 文化祭「南昌祭」での活動

防災復興委員会によるバザーを実施した。商品については全校生徒及び各ご家庭に呼びかけて家庭で不要な物を出品していただいた。大変多くの商品が出品され、バザーも盛況だった。売上金は「SAVE I W A T E」を通して県内の被災地に寄付させていただいた。また、バザーの会場となった教室では、上記にある1学年の被災地見学についてまとめた壁新聞を飾り、お互いの活動を盛り上げることができた。

また、1学年による沿岸地域の特産品の販売が行われた。来場者にとっても人気で、販売を開始して間もなく完売となり大盛況だった。

(3) ボランティア活動

今回で5年目になる。岩手県釜石市鶴住居地区の児童館を本校の生徒が訪れ、一緒にゲームをしたり、遊んだり、昼食を食べたりして時間を過ごす活動をしている。本校は県内のスポーツ推進の拠点校として創立された学校のため、運動に自信を持っている生徒が多数在籍しており、その生徒の特性を活かして他者に役に立つことをしたいということから始まった。鶴住居児童館には実際に被災した児童や親を亡くした児童、未だに仮設住宅で暮らす児童が多い。そのような児童達とふれ合う事で復興についての考えや理解を深め、将来岩手の発展にリーダーとして貢献する人材を育てるとともに、被災地の皆さんと多く関わり、様々な交流を深めながら、あの震災を風化させず後世に伝えて行くことを目指している。今回は1月に実施し、生徒たちが考えたゲームによる交流や、生徒たちが調理したカレーを児童や職員の方々と一緒に食べる交流を行った。

昨年度から児童館は新校舎に移った。新しく、そして以前よりも設備の整った環境となったが、釜石の町では今なおいたる所で重機が稼働していた。町の様子を見ることができたことも、生徒にとって非常に大きな経験となった。また、鶴住居地区はラグビーW杯が行われる地であり、活気づく町の様子がみられた。



鶴住居児童館での交流の様子

Ⅲ 取組の成果と課題

(1) 成果

- ア ここ数年継続して活動してきたことで、避難訓練や救護訓練、そしてボランティア活動が生徒にとって特別な行事ではなく、自分たちの仕事として捉えることができるようになった。また、生徒主体で工夫を凝らして自主的に活動できるように成長してくれた。
- イ 学校として、年間の学校行事として捉え、生徒一人ひとりが当事者意識を持って取り組む環境が整いつつある。特に沿岸被災地へのボランティアにおいては、多くの保護者や職員の方々に協力いただき、地域交流の意識を醸成している。
- ウ お互いに助け合い分かち合う「共助」の精神が生徒間で自然に養われている。また、コミュニケーションを深める機会にもつながり、全体の絆・結束が強まった。他者や環境を優先し、助け合おうとする様子が多く見られ、思いやることのできる生徒に成長してくれた。
- エ 生徒の中には、知識は未熟ながらも一生懸命活動することで他者の役に立とうとする姿が見られるようになった。また、自身が考える思いやりや優しさで他者に喜んでもらったという達成感や充実感、自信を身に付けることができ、日々の高校生活を意欲的に過ごすための一助にすることができた。
- カ 活動を通して復興防災について関心・意欲をもつ生徒が増え、地域の発展や有事の際のリーダーとして貢献できる人材の育成に寄与することができた。
- キ ボランティア活動に参加した生徒の多くは、将来の進路希望を教育関係の仕事に就きたいと考えている生徒が多かったが、参加した生徒の事後アンケートでは「来年も来たい」、「子供達から元気もらった」、「今回得た事を将来の仕事に活かしていきたい」という声が多く寄せられた。生徒達は、慣れない交流にも関わらず、子供達と一生懸命に関わり喜ばせようと頑張ることができた。その結果充実感を得る事ができた。活動を通して、他者への思いやりや分かち合うことの大切さ、何事も精一杯やれば相手に伝わること、そして相手が喜んでくれることの喜びなどを学ぶことができた。

(2) 課題

- ア 熱心に、そして真剣に取り組むことを照れる生徒も若干おり、全員で一緒になって活動できるところまではまだ至っていない。命をつなぐ大切な備えであることを教えていくと共に、生徒本人にも気付かせる手立てを工夫していきたい。
 - イ 担当者の能力や知識、資質によって大きく活動に影響すると思われる。研修や訓練を多く積んで生徒に還元していくことが必要である。
 - ウ 担当者、学校として、防災活動に関する学習教材や素材の知識が不足している。活用できるものや現状に応じた実現可能性を考慮して、取り入れていきたい。
- また、地域や保護者、その他関係団体の協力を得て、活動に生かせる資源を最大限に活用しながら、ともに生徒の防災意識の向上に努めていきたい。特に、今年度はPTAでも、沿岸被災地の復興状況をテーマとした研修を行っており、同じ目線で、防災、減災教育に取り組もうとしている。今後も連携して取り組んでいきたい。
- エ 復興教育をキャリア教育の視点で観察したとき、自己決定・行動選択をさせる場面と、教員がレールを敷いていく場面とのバランスを考慮することが大切である。目的を明らかにすると同時に、生徒の進路に関わる活動や貴重な体験活動と繋がることを意識したい。
 - オ 本校では復興教育に絡ませて防災教育に取り組んでいる。有事の際に防災リーダーとして地域に貢献出来る人材育成を目指している。「自助」・「共助」をバランス良く身に付けさせたい。しかし、「共助」の精神は養われつつあるが、「自助」の精神が少なく、まだ自分自身を守ろうという気持ちが少ない。結果、自分を守れないので他者を守るスキルも少ない。このあたりの力を防災教育・復興教育を通して身に付けさせたい。
 - カ 沿岸被災地へのボランティアについては、年を経るにつれ、復興支援の意味合いや、事業開始当初に目的とした被災者のために力を尽くすといった目的が薄れてきているように感じられる。地域交流の視点では生徒の意識の醸成が図れているが、必要とされるニーズが変化しており、それに対応しているかは疑問が残る。生徒たちの目的意識の統一を図るためにも、今後の活動や取組の見直しが必要と考える。